

アジアシリーズが描く「アジア」の変容

市村作知雄×河合千佳 対談

（文：萩原雄太）

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

フェスティバル/トーキョーでは、**2014年**以来、毎年「**アジアシリーズ**」としてアジア各国で先進的な活動を行う若いアーティストを招聘してきた。これまで、韓国、ミャンマー、マレーシア、そして中国と、**4カ国**を特集してきたこのシリーズの足跡を、『境界を越えて ～アジアシリーズのこれまでとこれから～』では、映像上映によって振り返る。いまだヨーロッパを中心とした価値観が残る舞台芸術において、アジアにフォーカスする価値とは何だったのだろうか？そして、アジアを取り上げてきたことで見えてきたものは何だったのか？前ディレクターの市村作知雄と、現在の共同ディレクターであり、アジアシリーズのほぼすべてに携わってきた河合千佳に聞いた。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

同じ感覚を共有するアジアのアーティスト

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——**F/T14**から、新たな試みとして「アジアシリーズ」が開催されてきました。まずは、この歴史を振り返ってみたいと思います。

市村　アジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」は、良好なネットワークがあった韓国の「フェスティバル・ボム」との協力によって生み出されたプログラムでした。韓国では、当時「多元芸術」と呼ばれる既存のタイプを越境するような新しいアートの動きが盛り上がっており、そこから新しいタイプのアーティストが数多く生み出されていったんです。

　　そして、2015年の「ミャンマー特集」から、F/Tでは「境界」「新しい人」というプログラムのコンセプトを掲げ、アジアシリーズでもこのテーマに沿った若いアーティストを招聘するようになります。ただ、現地で行われている演劇作品の多くは旧来型の保守的な作品ばかり。「新しい人」がいないんです。そこで、実際にリサーチに行き現地の文化を観察していると、クラブを通して若者たちが生み出す新しい文化が見えてきました。ここにこそ、ミャンマーの「新しい人」がいるのではないかと考え、演劇、映画、音楽が交差する『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』を実施したんです。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——そして、多民族多言語性やグローバル化による経済成長が著しい「マレーシア特集」に続き、**2017年**の中国特集では「チャイナ・ニューパワー　ー中国ミレニアル世代ー」として、**80年代**生まれのアーティストを取り上げています。

市村　中国特集は、これまで日本人が抱いていた中国に対するイメージを狂わせるものとして、とても大きな成果をあげました。特に、ミレニアル世代は、10代の頃にはインターネットが発達を遂げていた世代であり、情報が均一化した世界の住人です。

河合　スン・シャオシンによる『恋の骨折り損一空愛①場―』で描かれている、中国のミレニアル世代は、厳しいインターネットの規制をかくいぐりながらオンラインショッピングをしたり、海外のポップカルチャーを享受しています。日本のアニメも、過去のものばかりではなく最新のものが楽しめるんです。彼らと現場と一緒に仕事をする中で、ほとんど同じ感覚を持っているということに改めて気づかされた。ミャンマーも中国も、政治的な状況は日本と全く異なりますが、人の感覚そのものは変わらないんです。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』で上演したニャンリンテツの作品では「国家」が語られ、マレーシアのインスタントカフェ・シアターカンパニー『**NADIRAH**』では、多文化・他宗教の中で生きる人々のリアリティが語られるなど、アジアシリーズで上演された作品には「政治」や「社会」にフォーカスをした作品が多くあります。あえて、そのようなテーマを設けていたのでしょうか？

市村　あえてテーマに設定したわけではなく、自然とそうなっていました。特に、ミャンマーのアーティストの作品から感じたのは、彼らにとって、芸術と政治が分け隔てられていないこと。『彼は言った／彼女は言った』を上演したモ・サのパフォーマンスにも、身体に巻き付けた国旗から、イギリス、日本など各国に植民地化されたミャンマーの歴史を振り返るというシーンがあります。日本では「これは芸術」「これは政治」と、別のジャンルとして分けられています。アジアのアーティストにとっては、「芸術」の中には政治も社会も分け隔てなく入っている。むしろ、それらを区分けするのは、日本の特殊な発想なのかもしれません。

——過去5年にわたりアジアシリーズを開催する中で、「ア

ジア」という意味そのものも変わっていったのでしょうか？

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

河合　モ・サが開催しているフェスティバル『ビヨンド・プレッシャー』を視察したところ、代々木公園のような野外フェスティバルで、ボエム、ダンス、書、パフォーマンスアートなど、そのジャンルレスな内容に驚きました。日本では、演劇やダンスなどそれぞれのジャンルが長い歴史を持っています。しかし、彼らは、インターネットがあるおかげで、そんな歴史の重さをすり抜け、軽やかに現代と過去を接続したり、国内と国外がつながってしまう。時間も空間も飛び越えるその柔軟さには、衝撃を受けました。

市村　ミャンマーでもマレーシアでも、都市部ではスマートフォンやタブレットで情報を取得するのが当たり前。情報の格差がなくなることで、地域、国や民族の意味も変わっていきます。中国のアーティストだからといって中国で生活している必要はない。彼らの世代は、世界のどこにいても活動できます。そんな人々が、これから20年を経て、世界の中核を担うようになっていく。その時、どのような社会になっていくのかを考えていかなければなりません。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

河合　韓国特集の頃から、イム・ジエの『1分の中の10年』のように、もはや、出演者の国籍も活動拠点もバラバラという作品は数多く、舞台芸術を国という単位では語ることに意味がなくなりつつある。そのため、今年のアジアシリーズからは「トランス・フィールド」として国の枠組みを外し、ウェブサイトやチラシでも表記をシンプルにしたんです。今後も、この方向は継続していこうと考えています。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——では、アジアシリーズの取り組みを通じて、日本の観客にはどのような変化があったのでしょうか？

河合　もともと、アジア圏の演目は集客に苦戦していました。しかし、そんな流れが、16年のマレーシア特集くらいから徐々に変わっていきます。ヨーロッパで生まれた世界的に有名な演出家による作品ばかりでなく、アジアの作品にも注目が集まるようになっていったのは大きな変化ですね。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

映像の「つまみ食い」を新たな舞台の入り口に

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

河合　ソ・ヒョンソクによる『From the Sea』は、上演とは異なった体験をすることができます。ツアー形式で、俳優と1対

1で街を歩きながら行われるこの作品は、単なる記録映像としてではなく、まるで映像作品のような仕上がりです。上演とは異なった魅力がありますね。

　　また、劇場での上演では字幕と一緒に舞台を追うのは慣れていないと大変ですが、映像であれば一つの画面で字幕と上演をじっくりと見られる。その意味では、クリエイティブ・ヴァキによる『いくつかの方式の会話』や、インスタントカフェ・シアターカンパニーの『**NADIRAH**』などはとても見やすい。また、3人のダンサーが集い、それぞれが持つ動きのアーカイブを見つめ直したイム・ジエの『1分の中の10年』も、映像だからこそ3者の身体の違いをじっくりと楽しむことができます。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——今回は、スクリーンでの上映だけでなく、リラックスした空間でタブレットで楽しめるなど、さまざまなバリエーションの視聴環境が用意されています。来場者にはどのように楽しんでほしいでしょうか？

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

河合　ミャンマー特集で上演された『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン (B)』は、クラブのような劇場空間で生み出された作品を楽しんでもらえるように視聴環境を工夫しています。チェン・ティエンジュオの『初利天』や、スン・シャオシンの『恋の骨折り損一空愛①場―』など、中国のアーティストによる作品は、どれも、凝りに凝った小道具や衣装が使われているので、細かい作り込みまで楽しんでほしいです。

　　ただ、作り手の意図とは異なるかもしれませんが、興味があるものをつまみ食いすることができるのも映像が持つメリットのひとつ。歴代のアジアシリーズをすべて見ると10時間以上になってしまいますが、映像だからこそ、観客それぞれの興味をもとに、いくつもの作品の断片を楽しめる。それは、劇場とは異なった舞台作品の鑑賞方法であり、舞台への新たな入り口になるかもしれないと期待しているんです。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

——今回の取り組みは、単純にアジアシリーズを振り返るだけでなく、アーカイブの活用方法を探る実験の意味もあるんですね。

河合　F/Tも10年の歴史を積み重ねており、膨大な記録が蓄積しています。これらをどのようにオープンにしていくかは今後の課題です。アーカイブの活用方法という意味でも、ひとつのきっかけにしていきたいですね。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

F/T18エグゼクティブディレクター 市村作知雄
1949年生まれ。ダンスグループ山海塾の制作を経て、トヨタ・アートマネジメント講座ディレクター、パークタワーホールアートプログラムアドバイザー、(株)シアター・テレビジョン代表取締役を歴任。東京国際舞台芸術フェスティバル事務局長、東京国際芸術祭ディレクターとして国内外の舞台芸術公演のプログラミング、プロデュース、文化施設の運営を手掛けるほか、アートマネジメント、企業と文化を結ぶさまざまなプロジェクト、NPOの調査研究などにも取り組む。2017年3月まで東京藝術大学音楽環境創造科准教授。現在、NPO法人アートネットワーク・ジャパン顧問。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

アジアシリーズとは

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

　　国際交流基金および国際交流基金アジアセンターとの共催で、アジア各国の舞台芸術、音楽、美術などを紹介する本シリーズ。フェスティバル/トーキョーでは、2014年の「韓国」特集を皮切りに、「ミャンマー」(F/T15)、「マレーシア」(F/T16)、「中国」(F/T17)と、毎年、綿密なりサーチを実施し、歴史、文化、社会背景を踏まえた気鋭のアーティストの作品をキュレーション、あわせて多様な言語、文化、身体のあるり方を前提とした継続性のある交流の基盤づくりも行ってきました。

　　5回目の開催となる今回のテーマ「トランス・フィールド」は、これまでの「アジア地域から毎年1カ国を特集する」という枠組みを脱するものです。地図に描かれた国の形と、そこで醸成された文化は、必ずしも同じ輪郭を描くわけではありません。私たちは、そうした整合性の不在の背景にある歴史と文化の多様性を踏まえ、新たな視座から世界を見渡すことこそが、これからの「アジアシリーズ」に求められる役割だと考えています。

　　もちろん、越境や融解は、地理的な境界においてのみ起こっているわけではありません。アジア地域の多様で複雑な社会、文化を反映した表現においてもまた、芸術分野の境界を越えたさまざまな試みがなされています。今年も、こうした芸術分野の融合や表現形式の変化にも着目し、アジアの文化とその未来について、観客、参加者と共に思考をめぐらす場を提供していきます。共催：国際交流基金アジアセンター

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

『MI(X)G』 <p>コンセプト・演出：ピチエ・克蘭チェン 10/13 (Sat) - 10/14 (Sun) 南池袋公園</p>	ショブノ・ドル『30世紀』 <p>脚色・演出：ジャヒド・リボン 原作：バドル・ショルカル 11/3 (Sat) - 11/4 (Sun) 東京芸術劇場　シアターウエスト</p>
--	--

『ボンパン・イン・トーキョー』 <p>キュレーション：ローモールピッチ・リシー 11/10 (Sat) - 11/11 (Sun) 北千住BUoY</p>	『フィールド：ブノンベン』 <p>11/10 (Sat) - 11/11 (Sun) 北千住BUoY</p>
---	--

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

F/T18共同ディレクター 河合千佳

武蔵野美術大学卒。劇団制作、企画製作会社勤務、フリーランスを経て、2007年、NPO法人アートネットワーク・ジャパン (ANJ) 入社。川崎市アートセンターを経て、2012年よりフェスティバル/トーキョー実行委員会事務局。日本を含むアジアの若手アーティストを対象とした公募プログラムや、海外共同製作作品を担当。事務局運営担当として、行政および協力企業とのパートナーシップ構築、ファンドレイズ業務に従事。2015年より副ディレクター。日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師（2017年～）。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

もちろん、越境や融解は、地理的な境界においてのみ起こっているわけではありません。アジア地域の多様で複雑な社会、文化を反映した表現においてもまた、芸術分野の境界を越えたさまざまな試みがなされています。今年も、こうした芸術分野の融合や表現形式の変化にも着目し、アジアの文化とその未来について、観客、参加者と共に思考をめぐらす場を提供していきます。共催：国際交流基金アジアセンター

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

2014年11月、東京・有明コロシアムにてアジアシリーズの第1弾となった「韓国特集」の舞台芸術のワークショップの様子。市村作知雄（左）と河合千佳（右）が参加者とともにワークショップを行う様子。

『MI(X)G』 <p>コンセプト・演出：ピチエ・克蘭チェン 10/13 (Sat) - 10/14 (Sun) 南池袋公園</p>	ショブノ・ドル『30世紀』 <p>脚色・演出：ジャヒド・リボン 原作：バドル・ショルカル 11/3 (Sat) - 11/4 (Sun) 東京芸術劇場　シアターウエスト</p>
--	--

『ボンパン・イン・トーキョー』 <p>キュレーション：ローモールピッチ・リシー 11/10 (Sat) - 11/11 (Sun) 北千住BUoY</p>	『フィールド：ブノンベン』 <p>11/10 (Sat) - 11/11 (Sun) 北千住BUoY</p>
---	--